

一月一七日を《International Holocaust Remembrance Day》と国連が定めたのは二〇〇五年十一月の総会で採択された世界人権宣言に基づく決議でのこと。二〇一六年、十回目を数えるその日、縁あって、千鳥ヶ淵にあるイタリア文化会館が企画した「ホロコーストの追憶」のためのドキュメンタリー映画上映会で短い話をした。

『ミュンヘンの時計』（マリオ・カブート監督、二〇一四年制作）と題された六三分の作品は、一九三七年生まれの作家によるモノログ形式で、作家自身のナレーションが映像のなかで記憶を運んで観客へと手渡す直截な仕掛けのドキュメンタリーだった。主人公にして語り手をつとめる作家の名は、ジョルジョ・プレスブルゲル Giorgio Pressburger。一九五六年十一月、ソビエト軍がブダペストを侵攻した日、十九歳だったかれは双子の弟とともにハンガリーからイタリアへと逃れ、そこで演劇、映画そして詩に小説と領域をひろげながらイタリア語で表現をつづけている。兄弟が育ったのは、十九世紀初頭ブダペストに誕生したゲットー「第八街区」とよばれる界隈で、オーストリア・ハンガリー帝国崩壊によって抜け殻となった首都にあって唯一奇妙なにぎわいをみせていたという。暮らしに活気をもたらしたのがホロコーストを生き延びた人びとであったこと、そしてその暮らしがある朝、五千台の戦車によって呆気なく絶たれ、またしても離散の憂き目をみたことは、作家が亡命から三十年を経てはじめた書いた小説にも語られていた。

それは生者の側に立つその身が死者の側からこぼれ落ち、とり残された存在としてへいま、ここにあるわが身にとって、〈終わりの時〉をあらかじめ見てしまったがゆえにへいま、ここへに欠けているすべてを、けっして絶望やシニシズムに陥ることなく、そっくりそのまま再現することが課せられた使命だと心得る者のふるまいでもあるだろう。

書物が焼かれた同じ場所で、やがて人間も焼かれることになる——と唄ったハイネをドイツ語で愛読した十五歳の少年は、後年イタリア語作家となつてから、詩人が母方につながる一族であると知る。そして三代遡れば、カール・マルクスも同じく母方に連なるプレスブルゲル一族であり、フッサールも、メンデルスゾーンも、「燃え尽きた大地に撒かれた種がどこまでも拡がり育っていく」ように、中欧にとどまらず五大陸すべてに刻まれたディアスポラの痕跡に目を凝らす。

「すべての時代は繰り返す。そして早晩人びとはみな再び各おの孤独の内に閉じ籠もる。歴史原始の原始がそうであったように」——ジャンバッティスタ・ヴィーコの循環史観に作家が託した死者たちの声に耳を傾ける営みに、さてわたしたちはどう向き合えばよいのだろうか。